

## 客観的臨床能力試験の実施と評価(2)

－ 試問ステーションの評価と実技ステーションの評価との関連－

山本容子\*<sup>1</sup> 山縣恵美\*<sup>1</sup> 高尾憲司\*<sup>1</sup> 滝下幸栄\*<sup>1</sup> 毛利貴子\*<sup>1</sup> 笹川寿美\*<sup>1</sup>  
光木幸子\*<sup>1</sup> 倉ヶ市絵美佳\*<sup>2</sup> 眞鍋えみ子\*<sup>1</sup> 岡山寧子\*<sup>1</sup>

\*1 京都府立医科大学看護学科

\*2 京都府立医科大学附属病院

### 【目的】

看護実践能力の育成を目指した授業の包括的評価として、学士課程 4 年生を対象に試問ステーションと実技ステーションからなる客観的臨床能力試験（以下、試問 OSCE、実技 OSCE）を実施した。今回は、試問 OSCE による知識の状況と、実技 OSCE の得点との関連について検討する。

### 【方法】

1. 時期：2010 年 11 月

2. 対象者：学士課程 4 年生 20 名

3. OSCE の概要：

到達目標は、1. 潜在的顕在的なリスクを明らかにし、安全安楽を考慮した正確なケアの実施ができる。2. 複数患者に対し、優先度を考慮したケアのマネジメントができるとした。試問 OSCE の設問は、感染予防、医療安全、正確な実施、臨床判断力、看護の優先順位の知識を確認する 14 問で構成した。このうち感染予防、医療安全、正確な実施は実技 OSCE 課題に関する内容とした。実技 OSCE 課題は、「術後疼痛がある膀胱留置カテーテル挿入中の患者の移乗介助と輸液ポンプ使用中の患者への対応」である。試問 OSCE を 30 分実施後、実技 OSCE（15 分＋フィードバック 7 分）を実施した。実技 OSCE の評価は、大学教員と臨地指導講師（看護師長）が行った。

4. 分析方法：

試問 OSCE 及び実技 OSCE の得点率を算出し、Wilcoxon 符合付順位検定を行った。

5. 倫理的配慮：口頭で研究の概要及び参加の自由、不参加の場合でも不利益が生じないことを学生に説明し同意を得た。

### 【結果】

試問 OSCE の総合得点率の平均は 78.5% であった。得点率が高かった順に、正確な実施 85.1%、臨床判断力 82.5% 等であった。実技 OSCE の得点率は、高かった順に、正確な実施 72.1%、臨床判断力 70.0% 等であった。

試問 OSCE と実技 OSCE との関連では、感染予防に関する試問 OSCE の得点率は 71.0% で、実技 OSCE の得点率の 33.1% に比べ有意に高かった ( $p < .001$ )。同様に、臨床判断力も、試問 OSCE が実技 OSCE に比べ有意に高かった ( $p < .05$ )。

### 【考察】

試問 OSCE の評価から学士課程 4 年生の知識の状況はおおむね良好であったが、感染予

防、臨床判断力において実技 OSCE の評価との差がみられ、わかっているけどできない状況が推察された。今後、知識を実践に活かす能力の育成を目指したシミュレーション教育、臨地実習等での学習機会を増大させる必要性が示唆された。